

私は昭和15年、白保で生を受け今年80歳を迎えた。太平洋戦争開戦前に出生し、終戦直後昭和22年に白保小学校に入學した。今年白保小学校が創立130周年の節目を迎えるに当たり、戦中戦後の白保村、白保小学校の様子を回顧してみたい。

「戦中、戦後の白保村」

私が物心ついた4〜5歳の頃、白保には日本兵が大勢いた。ミノカサ部隊、ブンドウ部隊と呼んでいた。海岸から1き程の高台（ウイマシ）に部隊があった。部落内前盛家（オードー）には特攻飛行隊の伊舎堂隊もいた。轟川南側には陸軍飛行場が造られ、部落民は飛行場、防空壕（こう）、掩体壕構築のために動員させられた。カラダケの西側斜面下、マニシキナの崖下には

今でも当時の防空壕が残っている。

飛行場東側のソーバリ、フタナガ方面には米軍の艦砲射撃の弾光、弾音、ウイマシ方面には時限爆弾の爆発による発光、発煙を何度も目

70年前の白保村、白保小学校

榎本博義

撃した。爆音は部落内まで響き、その都度家族は耳を閉ざして地面に伏せて恐怖を忍んだ。

昭和20年終戦を迎えたものの安堵（あんど）感はなかった。部落民はマラリア罹

患（りかん）者が多数おり、毎日のように死亡者が出て、家族、親戚だけで簡単な埋葬を行っていた。私もマラリアに感染し、マラリア悪血を出血するために背中をカミソリで切り傷

され、バナナの汁液で背中を擦られたことを覚えてい

る。食料はムイアンガ、ソテツの実、パパヤの芯を食べ、まさにニートウパー（根と葉）、イモとはだし」の状況であった。

農業の主要作物はイモ、米、サトウキビ、ダイズであったと思う。部落の北側（シンバサ）に製糖工場があり、若者たちの雇用の場できわい終戦直後の村の復興に大きく寄与していたと思う。

3年は内原勇先生、4、5年は宮良長松先生、6年は仲宗根一雄先生、給事（用務員）は東川平サエさんでした。教員は白保出身の20歳前後の若い熱血教師であった。戦後直後の教員不足、人材不足だったと思われる

が、白保的、個性的な創意工夫、試行錯誤の授業は楽しい思い出である。教科書は無く、先輩から譲り受けた本の読み書き、兵隊さくん、兵隊さくんの言葉は今でも覚えている。

校舎はかやぶき木造校舎の平屋が3軒程であった。土間は砂利が敷かれ、板壁で仕切られ、隣の教室は板壁の隙間から見え、冬の寒さは身に堪えた。黒板は黒いペンキ塗り、2人で一つのペンチ型の机、いすを使用して

いた。学校内外にはたくさんのお木が林立していた。今でも

残る運動場の3本の老木周辺には4〜5本の太木、校門沿いにも太木があり、いろいろな鳥類が生息していた。特に忘れられないのがフクロウの不気味な鳴き声。恐怖を感じた。「白保小学校よ永遠なれ」

卒業して70年の年月がたつて今思うのは終戦直後の悲惨、劣悪な環境下でも級友は一生懸命生き抜いてきたということ。大学教授、国家公務員、公安警察、公衆衛生、地方自治の多くの分野で社会貢献

を行ってきた。白保村、白保小学校で過ごした苦労、苦痛が生き抜くエネルギーとなったと思う。今となつては郷里の皆さま、お世話になった先生方への感謝の気持ちでいっぱいである。白保村と白保小学校の限らない発展を祈念する。

（浦添市在住）